とある科学と最強の弟子

coge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学と最強の弟子

【Ｎコード】
Ｎ１５９２Ｍ

【作者名】
ｃｏｇｅ

【あらすじ】
一週間で２６人の学生が死亡するという事件が起きた。死因はどれも不明で被害者は全員能力者であった。風紀委員はスキルアウトによる犯行と断定したが、これには「闇」の幹部が関わっていた。本巻警部によってこの事件の解決を依頼された梁山泊一行は「常盤台中学の特別講師・岬越寺秋雨の連れ」という名目で学園都市へと訪れる。

プロローグ（前書き）

「史上最強の弟子ケンイチ」と「とある魔術の禁書目録」のクロスオーバーです。需要はないと思いますがケンイチのクロスオーバーは少ないので書いてみようと思いました。
兼一は高校二年生、孤塁抜きを得とくしている割と最近の状態です。
一方とある魔術の方は私が文庫本7巻を読み進めている途中なので時間軸としては初期のものとなります。浜面も五和も出てきません。
そこはご了承ください。
それでは武術と魔術と科学の織りなす波乱万丈の物語のはじまり、はじまり。

プロローグ

学園都市　第１８学区　某所　ＰＭ５：４６

人気のない裏通りであった。両脇を灰色の壁に挟まれ少し歩くと大通りに出る、どこにでもあるような普通の通りであった。

能力者の集団が数人、一人の無能力者の男子学生を囲んで脅し金をせびっていた。彼らは長点上機学園の学生である。名門と言われるだけあって皆３、４レベルの能力者であった。学生は彼らを恐れ財布から万札を二枚出すが、彼らはそれでも物足りないらしく無能力者の学生に暴行を加える。恐らくいくらお金を積んでも暴行を加える気でいたのだろう。数人がかりで学生の腹を殴り手足を踏みつけ挙句に小便を頭にかけると「ざまぁ見ろヒャハハ」と罵声を浴びせた。最後にリーダーが学生の頭を蹴飛ばして路地裏を去っていこうとする。

と、そこへ。彼らの目前に車椅子に乗った白髪の少年が現れた。

少年は１７、８歳辺りの体の弱そうな様態であった。良く見ると右目が変色していてオッドアイになっている。彼はゆっくりと彼らの元へ近づくと、まるで今までの犯行を見てきたかのように彼らに向かってつぶやいた。

「随分と低俗な犯行だな。これで今まで上手くいっていたのは親か学校側のお陰だろう。長点上機学園の学生も落ちるところまで落ちたのか。いや、お前たちがその最下層にいるんだろうな。」

たちまち、彼らは激昂した。しかしそれを抑えるようにリーダー

は静かに口を開く。

「へぇ。で、お前だれ？ここらじゃ見かけねぇ顔だから、恐らく他学区の人間か。不幸だったなァ。俺とお前の運命がもう一ミリずれていたら五体無事で済んだだろうに。…知らないか、俺達の事。ここらで最強を言わしめている『ザ・ボーンズ』って名前をよォ。」

刹那に、車椅子の少年のみぞおちへ金属の塊が叩きこまれた。

「俺はレベル４の能力者、『鋼鉄身体（メタルボディ）』。体を部分的に鋼鉄に変えて形をも変化させることができる。剣、槍、鎌、拳銃…鉄製の武器ならばなんだって模造する。だがお前は運が良い。さっき打ちこんだのはただ鋼鉄に変えた俺の拳だったのだ。俺はじわじわ嬲り殺すのが趣味でねぇ、次は手をナイフに変えて体を少しずつ切り刻もうか。それともハンマーで骨を砕こうか。どっちが……おや、気を失っているのか。」

少年を殴ったのはリーダーの側近の男であった。彼の右手は鈍い銀色の光を放ち自在に形を歪めてゆく。ぐにゃぐにゃとまるで蛇のようにうねる鋼鉄の右手はやがて元の手の形に戻り間もなく肌色を取り戻した。

車椅子の少年はうつむいたまま無言であった。殴られた衝撃が大きかったのか、背を丸めたままじっとしている。彼らは「やれやれ」と苦笑いをし、うずくまっている少年の右肩に手を置いた。

その瞬間であった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！」

悲鳴が路地裏中に鳴り渡った。見てみると少年の肩に手を置いた男の腕の骨がへの字に折れ曲がり、折れた先が皮膚を突き破って赤

黒い血液が湧き出ている。何が起こったのか、リーダーは自身の能力『遅行視認（スロウキャプチャー）』でその状況を捉えていた。指をはじく程の、まさに刹那に値する時間内での事だった。少年が右肩に手を置かれた瞬間左腕が男の掌を抑え右手の掌底が男の腕を捉えたのだ。ベキリと鈍い音がした瞬間に少年は両腕を離し、まるで何もしなかったかのように素知らぬ顔をしたまま車椅子に手を置いた。リーダーの眼は、この異様な事件の一部始終をとらえていたのだ。

「まさか、能力者だったとはなァ…」

リーダーの表情が険しくなる。同時に仲間の男たちにも重い緊張がのしかかった。

「肉体強化か、もしくは加速の能力か。まァ、それはどちらでもいい。今日の俺たちは幸運だ。久々に全力が出せる相手に巡り合えたんだからよォ！！」

彼らはリーダーの台詞間もなく、各々の能力を発動させて車椅子の少年に突撃した。流水操作、肉体強化、パイロキネシス、風使い…そのどれもがレベル３以上の能力であった。普通の人間ならばどれか一つを喰らっただけで重体となる。それが十人も寄り合わされば強力な殺人兵器となる。

少年はしかし動かなかった。ただ左手を彼らに向けて掲げ、じっと待っていたのだ。

「ハッ！馬鹿かよォお前は。左腕一本の肉体強化でこの攻撃を防ぐにはレベル５であっても足りねぇぜェ。ましてや加速は自滅行為、頭が膿んでるとしか思えねェ！！」

その言葉間もなく、少年はボソリと聞こえるか聞こえないかの音

量でつぶやいた。

「今日の私は運が良い。こんなにも優良な『実験台』が目の前に表れてくれたのだから。」

ピタリ。

それは、まるで時間が止まってしまったかのような不思議な光景であった。

つい数秒前まで血気盛んに突進していた男たちの動きが空中で静止したのである。時間停止の能力かと思われたが、そうではない。彼ら静止した男たち以外はちゃんと変化が進んでいる。時間は止まっていないのだ。

少年の左手が下ろされた。と、同時に静止していた男たちは地面に崩れ落ちそのまま動く事はなかった。男たちは全員死んでいた。

パチパチパチパチパチパチパチパチ

何処からともなく拍手が聞こえる。それはこの事件の目撃者である無能力者の学生ではない、身長2メートルはあろう白いフードの男であった。

「よくやった龍斗。いや見事であった、素晴らしい。」

フードの男は死体の山の横を通り車椅子の少年の元へと向かった。

「今の能力は最早レベル5の領域だろう。たった一カ月でこれほどまでに成長するとは私でさえ思いもよらなかった。さすがは私の弟子だ！」

車椅子の少年は特にうれしそうな表情は見せず「ありがとうございます。」とだけつぶやいた。しかし能力を一気に使ったせいか、少年は突然の睡魔に襲われその場で眠りこけてしまう。フードの男はやれやれといった表情で少年を肩に担いで携帯の短縮に連絡を入れた。

「私だ。朝宮龍斗の能力は今しがたレベル5に昇格した。実験に使用した人間と現場の後処理はお任せする。…ああ、次は学園都市最強と闘わせてみようか。あんたらが目指しているレベル6の能力者の誕生はもう間近に迫っているぜ。じゃあな」ピッ

連絡をし終わるとフードの男は少年を担いだまま姿を消した。まるで空間移動をしたかのようにフッとその場から消えたのだ。

倒れていた無能力者の学生は途中で意識を取り戻していた。そしてこの異常な体験を現実と受け止めてこの場から逃げることを決断する。フードの男の言った「後処理」とはこの事件がなかったことになるよう業者の手によってキレイさっぱり証拠を抹消することなのだろう。ならば目撃者である自分はこの場にいたら殺されてしまう。

逃げるのだ。学生は折れた足を引きずりながら必死に路地裏を脱出した。幸い今は夜でこのあたりは人通りが少なく人の目につく事が無い。誰にも気づかれず家へ帰るのだ。そうしてアンチスキルにありのままの事を説明して身柄を保護してもらおう。そう思いながら学生は誰もいない夜道を一人歩いて行ったのであった。

自分の血が足跡を付けている事も知らずに。

プロローグ（後書き）

なんか暗い内容から始まってすいません。次回からはケンイチらしい明るい内容に変わります。
執筆ペースは気分によって変わります。調子のいい時は一気に3話位書いて、悪い時は一カ月以上停滞することもあるかもしれません。
なるべく定期的にアップしようかとは思っています。
ではまた。

第一話　武術サイドの介入

学園都市　第六学区　ＰＭ２：３２

背丈は１６０?位だろうか、日本人男性としては平均的な身長と体格をした高校生くらいの少年が薄暗い路地裏を走っていた。時々うしろを振り返っては何かを確認しているところを見ると、どうやら誰かに追われているらしい。少年は、不思議と息を切らしてはいなかった。が、顔は幽霊にように真っ青であった。

「あんなの聞いてないぞ、あんなの聞いてない、火を噴く人間なんて、いるわけないんだあああああああああああああ！」

少年はそう叫びながら全速力で走っていた。彼の足は意外に速く、普通の人間ならばとうに撒いてるはずであった。

ただ彼を追う者は普通の人間ではなかった。この一帯を縄張りとするスキルアウトのグループ「セブンスター」のリーダー、レベル４のパイロキネシストであった。

「待て余所者がァァァァァァ！俺の部下全員のしやがって、タダじゃ済まさんぞォォォォォォォォォォォォォォォォ！！」

男は両手両足から炎を一斉に噴射し、まるでロケットのように低空飛行で少年の後を追っていた。

少年は「戦略的撤退だあああああああ！！」と声を張り上げてなおも走り続けていた。日ごろ無茶苦茶なトレーニングのお陰でここまでのスタミナと足腰を身につけた彼であったが、同時にこの不幸な

出来事の原因を作ったのもそのトレーニングをさせた「師匠たち」にあるわけで、彼はこの事件が起こるまでの経緯をふと軽く思い返した。

それは昨日の晩の事。彼が寝泊まりする道場「梁山泊」でいつものように厳しい鍛錬を積んでいた、その最中。

『あああああああああああああ、もう、駄目だあああああああああああああああああああ！！』

『あと二分だ、頑張りたまえ。』

『もう無理でえええええええす！休みまあああああああああああす！ついでに夏休みもくださあああああああああああい！』

『いいよ。』

『はいはい、どうせ駄ｍ……ってえええええええええええええええええ！！夏休みくれるんすか！！！』

『去年もやっただろう。私はそこまで鬼じゃないよ（ニコッ』

『…とか言って。まーた無人島に連れて行ったり山に置き去りにされたりとハードな内容満載何でしょう？』

『場所は学園都市と言うというところでね。国の最先端の科学技術が結集されたハイテクな隔離都市なんだ。そｋ…』

『な、なんだってーーーー！！あ、あの学生ばかりが集まる未来都市、現日本の３０倍の科学力を誇り司法・行政・立法・教育・医学・

工学・食品・娯楽に至るまで近未来日本を先取りしたあの学園都市に行けるのですかあああああ！？』

『…ふむ、まあそういう事だ。あ、でもこの鍛錬あと？一時間？続けないと連れて行ってあげないよ（ニヤリ』

『ッぐわあああああああああああ、悪魔めえええええええええええ！！鬼畜生めえええええええええええええええ！！』

学園都市の情報を詳しく調べなかった自分も悪かったとは思うが、わざわざ「誤解を招くような言い方」をして意図的に連れてこようとした師匠方の策略に少年ははらわた煮えくりかえる想いでいた。

『そういえば学園都市って具体的にどんなところなんですか？噂で聞いた位にしか知らないんですが。』

『そうだなぁ、しいて言えば？刺激的？なところかな。まあ行けば分かるが多分一生忘れられない場所だと思うよ。』

『刺激的なところ、一体どんな風に刺激的なんだ……』

『ギャルね！！』

『うわぁ！ビックリした。馬師父、ギャルってどういう事ですか。』

『分からんね？秋雨は具体的な内容を言わず言葉を濁したね。つまり、それは公言することに憚る内容だと言う事ね！』

『…確かに。岬越寺先生はどことなく話しにくい雰囲気で喋ってい

た。つまり話すと恥ずかしい内容だという事か！』

『学園都市は実験のためにあると聞いたね。しかし何の実験をしてるね？なぜおおっぴらに公開せんね？』

『それは……おおっと、思わず僕の妄想が公開されるところだった。…さあ、なんの実験をしているんでしょうね？』

『それに学園都市には女子校があるね、ギャルいっぱいね。おいちゃんの風の噂では学生の８割は美人と聞いたね！』

『本当っすかそれ。そうかぁ、美人が多いのかぁ、デートスポットも多いよなぁ、うふふふふ。』

（『やったね。これでケンちゃんは１００％学園都市に行くことが決定したね秋雨どん！』）

「あんな初歩的な策略に引っ掛かるとは……確かに？刺激的？ではあったけど……？刺激的？ではあったけど……」

「刺激的の意味が違うだろォがあああああああああああああああああああああ！！！！」

少年は追われながらも師匠への愚痴を延々と大声で叫んでいた。彼のこの心の叫びは彼にとっては最早生活習慣の一部となっている。常に限界を超えた鍛錬に次ぐ鍛錬、生死を駆けた決闘、壮絶なる達人戦と、我々一般人の常識をはるかに超えた世界を彼は生きているのだ。その内容はついこの間まで一般人であった彼にはまだあまり

にも重すぎた。そんな事で彼は大声で愚痴を言い続け、体にのしかかる負荷を発散し続けなければならなくなったのであろう。

と、そんな事を言っている内にロケットモードで追跡してくるリーダーが遂に真後ろまで迫ってきた。

少年にありったけの汚い暴言を浴びせると彼はそれまでの噴射量を増して一気に少年との距離を縮める。少年は死に物狂いで走り続けるが、さすがに体力が落ちてきた。やられる！　少年は意を決してスライディングでリーダーを回避しようかと試みるが、それよりも早くリーダーの右手が少年の脇腹をえぐっていた。

「あづっ！！」

摂氏３０００度の炎である。熱いでは本来済まされないが、少年は厚着をしていた上に中に「鎖帷子」を着用していた。これが直に炎が肌に触れるのを防いだのであった。しかしそれでもやはり火傷はする。少年はアスファルトに転げ回り熱を帯びた帷子を脱ぎ捨てた。彼の脇腹は痛々しい水ぶくれができていたが、それほど大した怪我ではなかった。

「どうしたァ余所者ォ！もう鬼ごっこは終わりなのかァ？んじゃァついでにテメーの人生も終わりにしてやるよォォ！」

リーダーの右手が白いプラズマで輝いた。熱を凝縮させ摂氏５０００度の炎を作ったのだ。あれを喰らったら今度こそひとたまりもない。少年は神を信じぬ派だがこの時ばかりは神を信じていた。

その時である。

５０メートル先の彼方から一筋の雷光がまっすぐと、リーダーの右手を狙って放たれた。

「ッぐァァァァァァァァァァ…」

リーダーの手から炎が消える。と同時に彼の真後ろへツインテールの少女が何処からともなく現れた。

少女は体術を駆使してリーダーを横転させ、間もなく手錠を両手にはめる。

「風紀委員（ジャッジメント）ですの！暴行傷害および殺人未遂の現行犯で逮捕ですわ。」

少年は何が起こったのか分からずにいたが、これで一件落着したことは理解できた。彼は突っ伏したまま起き上がらずにいた。脇腹の負傷は問題ないが、長時間走り続けていた疲労と安堵からくる安眠効果でぐっすり熟睡していたのである。

風紀委員を務める白井黒子は犯人を警備員（アンチスキル）任せたあと、被害者である半裸の少年を運ぶため担ぎ起こそうとした。肩に手を通し持ち上げるが、少年はなかなか持ち上がらない。「あれっ、おかしいですの」と小言をいう黒子を見かねてもう一人の風紀委員モドキが自分と代わるよう命令する。それは先に雷光を飛ばした女子中学生であった。

「変わりなさい。ったく、無理せずに素直に頼めばいいのに。よいしょ……って重ッ！！何コレ本当に重い！」

「だから言いましたのに。この殿方、見かけ以上にデブなんですわ。この方の搬送はアンチスキルに任せましょう。」

「うん、そうね。でも見かけ太っているようにはみえないし、不思議なことってあるのね。」

「あらん、でもこの黒子の愛は不思議なことではなくってよ。現実を受け止めてーお姉さまぁ！この黒子の気持ちヴぉ」

少女のげんこつが白井黒子の頭に振り下ろされる。黒子は痛がる降りをしながらもなおチャンスをうかがている。

「でも、一大事にならなくてよかったわ。まあ、あれだけ街中で叫ばれると嫌でも耳にはいっちゃうけど。」

少女の言うのは少年の心の叫びの事であろう。その大声は路地裏に留まらず１００メートル範囲まで響き渡っていた。

「迷惑なんてもんじゃありませんよ。学園都市がどんなところか知っていたらトラブルに巻き込まれずにすんだのに…」

「まぁまぁ黒子。この人見たことのない顔だし多分外部の人間なのよ。知らない人が居たって不思議じゃないわ。」

少女は少年をかばうように白井黒子に言った。黒子はならば、という顔で再び少年に向かって言った。

「ならばお姉さまの事も知らないんではなくて？学園都市第三位の『超電磁砲（レールガン）』の電撃姫を。」

「知らないでしょうね、多分。それどころかここのシステムや法律なんかも知らなそう。」

「まあ知らなかったら教育すればいい話ですの。二週間もあればこの都市のことは大体理解するでしょう。」

そう言って黒子はアンチスキルに少年の身柄を搬送させた。少年が運ばれていく様を二人はじっと眺めている。

御坂美琴はこの出会いが思っている以上に永く続いてしまう事をまだ知らなかった。

第一話　武術サイドの介入（後書き）

実質一日で二話書き終えました。
なんか最近調子がいいんですよね。気分がどうとかそんなんじゃなくて、こう創作意欲が湯水の如く湧き出る感じというのかな。とにかくすごく書けるんですよね。
次回は師匠の誰かを出したいと思います。今のところ秋雨かおいちゃんで。
それではまた。

第二話　岬越寺秋雨の場合

学園都市　第十一学区　ＡＭ１０：０２

前回より四時間程前の話である。

「ここが、学園都市ですかー！」

薄茶色のジャケットを着たジーンズ姿の少年が興奮を抑えきれぬ様子で第一声を張り上げた。

「大きい建物、連なる風車、空に浮かぶ飛行船……おおっ、あの円筒形の機械は何だ！自動でゴミを集めてる！！」

少年は目をキラキラさせてあちこちの風景を眺めている。第十一学区は他学区に比べて少々地味な場所であるが、部外者にとってはそれすらも真新しく輝きのあるものに見えてしまう。これがもし第三学区や第六学区となれば、彼は失神してしまうのだろうか。それほどまでに少年はこの未知の学園都市に驚きと感動を抱いていた。

「ほっほっほ、ケンちゃんすごく楽しそうじゃのう。まるで初めて電車に乗った小さな子どものようじゃわい。」

「ほんとね。ちょっと興奮しすぎな所もあるけど、十二分に楽しんでくれてるようだから連れてきた甲斐があったってものね。」

歓喜し続ける少年を微笑ましく見守るのは背丈二メートルを超す

老人と対照的に体の小さな黒ひげの男。
　巨躯の老人は自身の長いあごひげを丸木棒のような指で軽くすき、黒ひげの男は首に下げたカメラのファインダーとレンズを磨いている。その真横を静かに歩くすらりと背の伸びた細身の男は、短く生えそろった口髭を歪ませて少年に聞こえぬ様つぶやいていた。

「まさか、追加一時間を本当にやり終えるとはね。冗談のつもりだったのだが、まあそのお陰で今後鍛錬をもっときつくしても死なないと言う事が判明されたから良しとしよう。二時間を三時間、いや四時間に増しておこうか（ニヤリ」

　白く整った男の顔が、邪鬼のごとき笑みを浮かべる。それは整っているからなおさら不気味に感じるような、能面の如き笑いであった。そんな彼の笑みを一瞥しながら部外者用のパンフレットを開き、第六学区の紹介ページを隅から隅まで読みとおしている男が居た。背丈は１９０?くらい、黒色の革ジャンをはおりピチピチのジーンズを着ている大柄な男。異様なのは彼の両腕の筋肉が異常に発達しているという事だった。

「パチンコ、パチンコ……お、あったあった。この学区内に3件か。んー、なんか少ねぇなぁ。いい出玉台あんだろうなぁ。手持ち金額が少ねぇから遊べる回数も限られるし。台も知らねぇメーカーのばっかだから当たる確率は未知数だしなぁ。」

　うーん、と男はパンフレットとにらみ合い強面の顔をさらに強張らせている。その形相はまさに苦悶の表情を浮かべた地獄の鬼の顔そのものであった。彼は先日、近所のパチンコ屋で一時大儲けをしたのだが、あまりに玉が出過ぎたため調子に乗って手持ちの玉全てを賭けにだし、そのまま全てをスッてしまうという大損を犯したばかりであった。そのせいで現在はジリ貧である。今の手持ちでもパ

チンコをする事はできるが、今度負ければそれこそ破産だ。男は悩みに悩んでいた。
そんな彼の苦悶をよそに、彼の革ジャンを裾を引っ張る女性の白い手があった。クイックイッと二、三度引っ張ると男は女性の存在に気付く。

「…ん？なんだしぐれ。どっか行きたいとこでもあんのか。」

男が親切心でパンフレットを渡そうとすると女性は無表情で答えた。

「違う……アパチャイが……いない」

話すことが不得手なのか、女性は言葉のところどころに間をおくようにして喋っている。
革ジャンの男はそれを聞くやパンフレットを握りつぶして形相を変えた。どっちかって言うと怒りの形相だ。

「何ィィ、なんでそれをもっと早くに言わなかったんだ！　おい、秋雨！！アパチャイがまたどっかへ行っちまったみてーだぞ！！厄介ごとが起こる前に見つけろ！　しぐれはあっち、剣星は向こう、秋雨はこっちで俺はそっちな！」

口髭の男、岬越寺秋雨と黒ひげの男、馬剣星はやれやれと言った表情でその場から消えた。
革ジャンの男、逆鬼至緒は苛立ちを隠せぬ表情で彼方へ走り、ポニーテイルの和服の女性、香坂しぐれはやはり無表情のまま上空へと消え去る。残された巨躯の老人、風林寺隼人も「わし、呼ばれてないんじゃが…」とつぶやいてしょんぼりしたままその場から消えてしまった。

その場にとどまったのは先の少年ともう一人、金髪の少女であった。少年は未だ都市の見学に夢中であったが、突然周りが静かになって初めて事態を把握する。誰もいない……彼の傍らに立つ少女意外、同伴していた大人たち全員が消えてしまったのだ。何が起こったのかわからずあたふたする少年を見て、少女はクスリと軽く笑った。

「皆さんアパチャイさんを探しにいったのですわ。ここは珍しいものばかりだからアパチャイさんも興奮していたのでしょうね。学園都市は広いですから皆さん全員で探しに行かなければならなかったのでしょう。兼一さん、私たちも探しにいきかしょうか？」

金色の長髪を風になびかせて少女は少年に説明した。少年はもうしばらくこの風景を見ていたかったが、そのときある事に気がついた。これはもしや、デートというものなのではなかろうか。そう思った刹那、少年は急に背筋をのばし表情をキリリと引き締めると少女の提案に応答する。

「ハハッ、いいですね。僕もアパチャイさんが心配だ。日常と異なる近未来の世界に迷い込んでトラブルに巻き込まれているやもしれない。？一緒？に探しに行きましょう。まずは第六学区に行ってみましょうか。そうだ、そうしましょう。では、さっそく出発しましょうか美羽さん（キリッ」

少年の言葉にどこか下心がある気がしてならないものの、金髪の少女、風林寺美羽はアパチャイを探し出す為に彼と歩き出すことにした。少年は都市の風景を目の当たりにしたときよりも興奮した面持ちで彼女の真横を歩いている。

こうして彼ら「梁山泊」はバラバラの個別行動となり、その後デートの最中に美羽ともはぐれて単独になったところをスキルアウトに襲われ今に至るということであった。

「…つまり、貴方は連れの方とはぐれて迷子になったという事ですわね？」

「はい、その通りです…すいません。」

少年、白浜兼一は第七学区の病院に搬送されて翌日意識を取り戻した。

火傷は学園都市の最新の医療技術で跡形も残さず治っている。ただ肉体疲労と精神的疲れで深く眠りこんでいたが、普通なら三日三晩寝こんでいなければならないものを彼は一日で回復し、体を起こせるようにまでなっていた。彼を治療した冥土返し（ヘブンキャンセラー）もこの回復力は目を見張るものがあるとして彼の事を高く評価した。

彼の病室には現在、風紀委員の白井黒子と学園都市第三位の『超電磁砲』御坂美琴が立っている。事件についての事情聴取を兼ねた被害者へのお見舞いである。二人は病室へはいってくるなり彼がもう起き上がっていることに驚いた。時速６０？で飛行するパイロキネシストの男から逃げ続け、服の内側に鎖帷子を着こみ、細身の体からは想像もつかない程重く柔らかな肉体を持つ。白浜兼一という男に彼女達は昨日から驚かされっぱなしであった。

そんな中、彼は連れとはぐれ居場所がわからないでいるのだと二人に話した。風紀委員は凶悪犯罪の解決から町のごみ掃除まで扱っている。黒子は「わたくしたちにお任せくださいまし。」と言うと鞄の中から携帯を取り出して第１７７支部に連絡を入れた。

「そういえばアンタ、携帯電話でその人たちに連絡を取ることはできないの？」

御坂美琴は白浜兼一に素朴な疑問をぶつけた。

「ああ、うん。携帯は…持ってるらしいんだけど。その…番号がわからないんだ…」

ふぅん、と御坂がうなづくと、兼一は何かに気づいたのか顎に手を当てて考え出した。

（確かに師匠たちが携帯を所持しているのは何度か見たことはあるけれど、そういえば番号知っているのは逆鬼師匠のしかないんだよなぁ。でもあの人絶対第六学区で遊び呆けているはずだし、あの人は別に探さなくてもいいか。馬師父は恐らく第五学区。女子大生とか追っかけてそうだなよなぁ。しぐれさんと長老はわからない。繁華街とかにいきそうかな？岬越寺先生はどこだろう。あの人芸術とかできるから第九学区にいって美術学校の講師をしてたりして……）

兼一が脳内で様々な妄想を展開している最中、黒子の携帯はようやく相手につながった。

「ああ、初春ですの？ちょっと探してもらいたい人が居るのですけれど…」

そう言うと彼女は兼一に連れの特徴と行きそうな所、行動パターンなどを訊いた。兼一は正直に答える。

「一人は黒い革ジャンを着たジーンズ姿の男性です。三十歳くらいで身長は高く腕回りが僕の腰回りほどあります。ギャンブルが好き

でパチンコ屋とかに寄っているかもしれません。二人目は深緑色の帽子と服を着た小柄な中年男性です。常にカメラを首に下げて女子高生を追っかけています。三人目は桃色の着物を着たポニーテールの女性です。この人の場合は特殊で、屋根の上に登っていたり煙突の先にいたり車の上を跳び移っているかもしれません。あ、いつも頭の上にペットのねずみを乗せています。四人目は白いランニングシャツを着た浅黒い巨躯の男性です。身長は2メートルくらいで子どもの好みそうな場所にいるかもしれません。五人目は金髪の女の子で僕と同じ年齢です。あ、日本人ですよ？ベージュのジャケットにチェックの入ったミニスカートを着ています。ネコとショッピングが好きなので繁華街にいるかもしれません。六人目は彼女のおじいさんで、2メートルを越える金髪の巨人です。緑色の着物を着て骨董品屋を廻っているかもしれません。そして七人目は白い着物に袴を穿いた細身の中年男性です。凄く日本的な人で、興味のあるところは何処にでもいくので正直どこにいるこか見当もつきません。以上です」

当然のことながら、そんな奇妙キテレツな格好をした漫画のような設定を持つ人物がいるとは普通の人はにわかに任じがたい。

白井黒子と御坂美琴は彼を疑いの眼差しで見つめた。

「それ、本気で言っているのよね？」

「嘘じゃないですよ。まあ嘘みたいな人たちだけども、本当の事です。」

「頭を強く打ちつけたのではなくて？そんな能力者ならともかく、都市外の無能力者に車の上を飛び移れますか、普通。」

「飛び移れるんだから恐ろしいよね。一体どんな体してんだかこっ

ちが知りたいくらいだよ。普通じゃないんだよあの人たち。」

黒子と御坂は目を合わせた。この少年は嘘をいているのだろうか。そうはみえないがとても本当の事を言っているとも思えない。何かを隠しているのか、はたまた頭を打ったのか。多分そんなことを今問いただしても彼が答えるはずがないことは二人はよく理解していた。

「まあ、いいですわ。聞こえてますわよね初春。今彼が言った特徴を持つ人物を探し当てて下さいまし。」

黒子がそういうと電話の奥で「わかりましたー」という声が聞こえた。第177支部に所属する初春飾利は黒子も舌を巻く名ハッカーだ。今彼女のみているパソコンのモニターには学園都市に設置されている防犯カメラの全ての映像が流れている。その中で条件にあった人物を探し出してゆく。一見目の回るような作業だが、彼女にしてみれば日常的に行っているためスイスイと手軽くやってのけている。

しばらくの時間が立ち、黒子の携帯に初春からの連絡が入る。

『あ、白井さん。特定おわりましたー。』

「で、結果はどうでしたの初春。一人くらいは特定できて？」

黒子も御坂も内心、特定できなかったと初春が言うのを信じていた。そして初春は。

『それがですね。あの、何て言うか…』

「なんですの。特定できなくても別に貴女を責めたりはしませんわよ。ハッキリとおっしゃって。」

『その。兼一…さんが言った人物の特定、全員完了しました。』

ん？よく聞こえなかった、とでも言いたげに黒子は怪訝な表情でいたが、やがてその言葉の意味を心中で何回も繰り返しや。

「…マジ、ですの？」

『マジですよ。革ジャンを着た男は現在スキルアウトの根城「ストレンジ」に、緑の服を着た帽子の男は霧ヶ丘女学院の前に、桃色の着物を着た女性は浅黒いランニングの大男と十五学区の繁華街に、金髪の女性は第五学区に、その女性のおじいさんは第十九学区に。そして袴を穿いた細身の男性は、この病院の中にいます。』

「な…」

「「「なんだてえええええええええええええええええええええ！！」」」

その時。

足袋の足音と袴がすれる音がした。それは、確実にこちらの病室を目指して歩いている。

「彼」の横を通った看護婦はみな頬を赤らめた。そのストイックでダンディズム溢れる顔と身のこなしは一体過去何人の女性を落としてきたのか。足袋と袴の音が病室前で止んだ。引き戸をスッと開けたその男の顔を見て、三人は思わず声を上げる。

「「「こ、岬越寺先生！！」」」

はて。兼一は首をかしげる。自分が「岬越寺先生」というのなら分かるが、この二人は彼を知らないはずだ。
何故二人は岬越寺秋雨の事をしっていたのか。その答えはわりとすぐに出た。

「おや、いるのは兼一君だけかと思ったが。なんだ、君たちもいたのか。」

「近代芸術の先生が、どうしてここに！？」

近代芸術の先生。なるほど、そういうことか。
道理でおかしいと思っていた。学園都市は普通内部関係者の親族か知りあいでないと入ることが許されない隔離都市だ。なにかしら入るには資格ってものが必要になってくる。たとえば学園都市側が必要とする人材、技術者や医者や学者など。岬越寺秋雨はその中で「学者」として学園都市への入場を許可されたのだ。
やっぱこの人はスゴイ、白浜兼一は改めてそう思った。

「そういえば紹介していなかったね。彼の名は白浜兼一。私の一番弟子だよ。」

ええええええええええええ、という声が上がると兼一は同時にビックリした。
安永先生の記憶がよみがえる。また良く分からな誤解をされるのは御免だ。兼一はそうなる前に手を打とうとした。

「あ、あのね。弟子っていっても…」

「ス…スゴイじゃないアンタ！現代を生きる天才芸術家、岬越寺秋雨の弟子だなんて。アメリカの大統領になるよりも難しいことなのに、意外な大物だったのね。」

「本当ですわ。貴方がそんな天才の卵だったなんて黒子全く知りませんでした。…サインもらっておくと後でプレミアつくかしら。いえ、何でもないですわ。」

遅かった。いや、まあ誉められるのは嫌じゃないんだが…誤解ってのは何か人をだましているみたいで誉められても良い気分にはなれないだろう。白浜兼一は一刻も早くこの誤解を解こうと次に喋る台詞を考えた。

『実は僕、芸術家の卵じゃなくて武術家の卵なんだ。岬越寺先生はあまり知られてないけど柔術の達人で、僕は先生から柔術のいろはを教わっている所なんだよ。』

と、言えばいいのか。いや、この場の空気と彼女達が武術家である岬越寺先生を知らない所を仮定するとすぐには信じてもらえないだろう。安永先生ですら知らなかったし。でもそれならばどうすれば、一体、どうすれば。

「それでは私たちはここで失礼します。お話のお邪魔になるといけないので。」

「事情聴取もおわりましたし。ここは気を使って退室させていただきますわ。」

黒子がそう言い終わると彼女は御坂の肩に手を置きその刹那フッと姿を消した。
兼一は結局誤解がとけず、それに加え前回よりもはっきりと空間移動の瞬間を目の当たりにして開いた口がふさがらなかった。

「ん？どうしたね兼一君。ここで彼女の超能力を見るのは初めてのことじゃないだろう。」

兼一は秋雨の質問にしばし黙っていたが、やがて何かに納得するとようやくその口から言葉が出た。

「…岬越寺先生。学園都市って学生を対象にした様々な実験を行っているところと聞きましたが、それってもしかしてああいう超能力を開発したり研究したりする、そんな場所なんですか？」

「なんだ、知らなかったのか。学園都市は外部にあまり情報を漏らさないがその目的事態を知る人はけっこう多くいるんだよ。超能力の研究、例えば兼一君がここの教育を受ければもしかしたら超能力が使えるようになるかもしれない。まあ、多くの能力者は幼いころから開発されてやっと能力を得たようなものだから今からじゃ無理だろうけど。とにかくここは我々の常識をはるかに超えた科学と超能力の世界だと言う事だね。」

超能力の開発。出あったのだと自在に火を操るパイロキネシスト、電気を操るレールガン、瞬間移動をするテレポーターか。本当に、なんでもありなところだな。と言う事は、この学園都市内には学生の数だけ超能力者が居ると言う事か。他にはどんな能力者がいるのだろう。水が操れたり動物と話せたり透明になったりできるのかな。白浜兼一はそんなおとぎ話のような世界を頭の中に描いていた。

「ところで兼一君。体の方はもう大丈夫なのかい？」

「あ、はい。ここの医療は凄いみたいで一日で全回復してしまいました。ご心配をかけてすいません。」

「いやいや。君が健康ならばこちらは何の文句も言わないよ。健康は一番の資本だからね。」

「はい。ありがとございます。」

予想以上に優しい秋雨の言葉に兼一はなんだか違和感を覚えた。いや、これが彼の本来の姿なのだ。いつもは厳しくしてるけど師匠の中ではだれよりも自分を大事に想ってくれている。日常のあの仕打ちは愛の鞭なのだ。兼一はそう思いながら内心とてもうれしかった。

「じゃあもう今から鍛錬は始められるね？」

「…はい？　鍛錬…やるの？」

「当たり前だろう。一日でも怠ければ人間は一生怠け癖がついてしまうものなんだ。安心したまえ。病室でもできるトレーニングメニューを２４時間分考えてきた。私の自作の器具もある。その名も添い木人君一号、２４時間睡眠時間を除いて寝ながら闘う事のできる優れモノだ。いまならオプションとして腕を四本に増やすガジェットアームもついてくる。使い方は木人君を天井につりさげて…」

秋雨は何処からともなく１６０？大の木の人形を取り出し、支える為のパイプ云々を超高速で組み立て始めた。

兼一はさっきまでの甘い考えを撤回し、やっぱりこの人は悪魔な

んだと心の底から思うのだった。

第二話　岬越寺秋雨の場合（後書き）

やっぱ最近調子が良い。気のせいか窓から入ってくる風の匂いもとても清々しく思えてくる。
師匠たちの紹介おわり。話が全く進んでいないけど、それは次回に期待して下さい。

ではまた

停止とお詫び

単刀直入に言います。

リニューアルします。

たった3話でリニューアルとか、どういう話かと笑うでしょうが。

ちょっと面白い設定が浮かんだので、いっその事一からやり直そうと。

で、今回限りでこの物語を終わらせて、

下記のＵＲＬに新しく小説を書くことになりました。

この作品よりも面白い小説を書くつもりでいますので、

興味のある方は是非ご覧になって下さい。

長い間更新しなくて本当に申し訳ありませんでした。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１９８９ｓ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1592m/

とある科学と最強の弟子

2011年5月26日07時05分発行